

双葉郡地区の児童生徒と障害者の避難と今後

原発事故・学校教育・障害者・地域再生

宮城教育大学名誉教授
全国障害者問題研究会宮城支部
清水貞夫

はじめに

福島県双葉郡8町村（浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町、広野町、葛尾村、川内村）は、地震、津波、加えて原発事故というトリプル災害に見舞われた地区である。そこは、今や子どもたちの育つ場所ではなくなってしまった。子どもたちの発達に必要な人的及び社会的絆をずたずたに裂いたのが放射能である。ある子は、父親が現地を離れられないまま母親の実家に避難した。また誰もが学校で一緒に学習していた仲間と散り散りバラバラになった。放射能問題は、こうした人的絆を切断してしまっ

た。切断しただけでなく対立させ生じさせている。母親は子どものためを考えて遠方に避難した。父親は仕事の都合で双葉郡地区を離れない。また「お家は壊れていないのではありません。それなのになぜ帰れないの」という子どもがせがみに、親は上手く答えられない。祖父と祖母は「私たちが一生をかけて耕してきた畑や田圃を離れて遠くに疎開するなどできない」と、嫁に愚痴る。家族の絆さえも切断してしまっただけでなく、子どもたちは、外に買物に出かけたり、友達と遊んだり、公園を散策したり、図書館に行ったりという日常の社会的絆を断ち切られてしまった。

そして、20キロ圏内へはいつ帰ることができても震災1年7ヵ月後においても不明である。放射能が子どもから奪ったのはそれだけでなく発達に必要な自然がある。子どもは自然の中で自然を相手にして働きかけ働き返されて成長していく。だが、双葉郡地区の子どもはそれができない。福島県内の幼・小・中学校では校庭の表土を5〜10センチはがすか裏返した。だが、里山に入ることはできない。校庭での外遊びはできない。運動会は、屋内体育館で、出番まで教室で待機し、テレビで視聴して出番になったら体育館に出かけ、演技し終えたら教室に退場である。猛暑の夏、節電を強い

られただけでなく、子どもたちはプールにも入れなかった。プールに入れるようになったのは1年後の夏であり、それも除染の済んだ一部の学校であった。福島大学付属小学校（福島市内）では子ども一人ひとりに線量計を持たせて通学させているという。目に見えない放射能は、子どもたちから人的・社会的絆を奪い、自然との関係を断ち切ってしまった。このような状況の下で、最も大変な思いをし、悲惨な状態を経験しなければならなかったのは障害児である。本稿では、双葉郡地区の小・中学校や高校の原発事故発生後からまもなく、障害者施設と養護学校／特別支援学校の子どもの避難状況と今日の様子をフォローしながら、原発事故が我々に突き付けている課題を明らかにしようと思う。

ところで、2011年12月に野田総理大臣（当時）は原発事故収束宣言をだしたが、とんでもない。原発避難は続いている。10年、20年、30年という歳月があつて、はじめて収束を迎えるのであろう。

福島県の人口は約200万人、そのうち避難者は約16万人に達している。このうち約10万人が県内に留まり、6万人が県外に避難している（2012年6月現在）。避難者率は200分の16と計算されるが、この数値を多いと考えるか少ないと考えるかは人により異なる。だが、それぞれの歩んできた人生を強制的に大転換させられ、それぞれの事情の下、苦難に満ちた生活を強制的に余儀なくさせられている事実は否定できない。

1. 逃げまどう障害者と住民

3月11日、マグニチュード9・

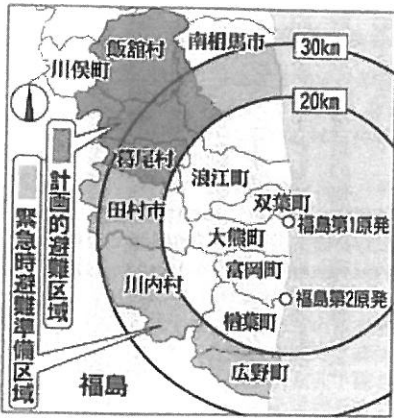
0の地震が東北を襲った。福島第一原発1〜4号機は全電源喪失、原子炉と使用済み燃料プールは冷却機能を失う。3月12日、1号機水素爆発、建屋が爆発、メルトダウンが起きる。富岡町住民は町や村の有線放送で避難指示を知る（富岡、浪江ともに、町長がテレビをみて避難を決定した）。18時25分、半径20キロ圏内の住民に避難が指示された。この間、原発の危機を察知した人々は、自動車や東京方面、福島市、郡山市、遠くは新潟市まで逃げ出していた。3月14日、3号機と4号機が水素爆発、建屋が大きく破壊される。これは、世界最悪のレベル7と認定

された。広島型原発168個分に相当するセシウムが漏れ出たと言われる。この間、政府は「直ちに健康に影響はない」との発言を繰り返すだけであった。3月15日11時、20〜30キロ圏内の住民に「屋内退避」が指示されたあとでこのとであった。

富岡の人々は、「屋内退避」で建物の中に留め置かれ動きが取れない状態に陥った。富岡は大熊、楢葉、双葉とともに「原発立地四町」に数えられる。富岡町には第二原発が立地していた。原発にぶら下がってきたと皮肉を言われている町である。その海沿いは津波で消滅した。津波はJR常磐線の富岡駅を完全に水没させ、富岡川は町の中心部を水没させ、町の電気、電話は不通になった。富岡町の人口は約1万5千人である。

富岡の町民が集団で避難したのは隣り村の川内村（30キロ圏内）であった。住民は、2〜3日で帰宅できるものと考えて避難したため、ほとんど荷物を持たなかった。川内村は人口2800名である。そこに約6000の避難住民が押

3月11日 3*。圏内避難指示
12日朝、避難指示10*。圏に拡大
午後 避難指示20*。圏に拡大
15日 20〜30*。圏屋内退避指示
4月22日 20*。圏内 立ち入り禁止
20〜30*。圏内 居住不許可
9月22日 20〜30*。圏内 指定を解除



し寄せ、大混乱に陥る。富岡町には、「福祉の里とみおか」があり、知的障害者施設が立地していた。福島県福祉事業協会・東洋学園（児童部、成人部、育成会、原町学園などを経営）と福島県立富岡養護学校（原発から6・5キロ）もそこに立地していた。東洋学園は、児童部として就学年齢にある児童生徒とともに、就学年齢をこえた過年齢者が生活をともにしている知的障害児入所居住施設であった。富岡養護学校は、知的障害児の特別支援学校であり、全校在籍児童生徒119名の学校であった。生徒のうち半数は隣接する障害児入所居住施設・東洋学園児童部（東洋学園には成人部もある）から通っていた。残りはいわき市などの近隣の市町村からの自宅通学生であった。2時46分の地震により、土台が少し沈む、一部壁がはがれ、グラウンドは液状化で駐車中の自動車も沈んだものの、校舎は無事であった。当日、学校に残っていた生徒は少なく、自宅通学生を乗せた通学バスは学校を発車していた。電車通学の生徒は夜ノ森駅（常